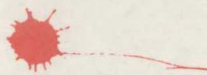
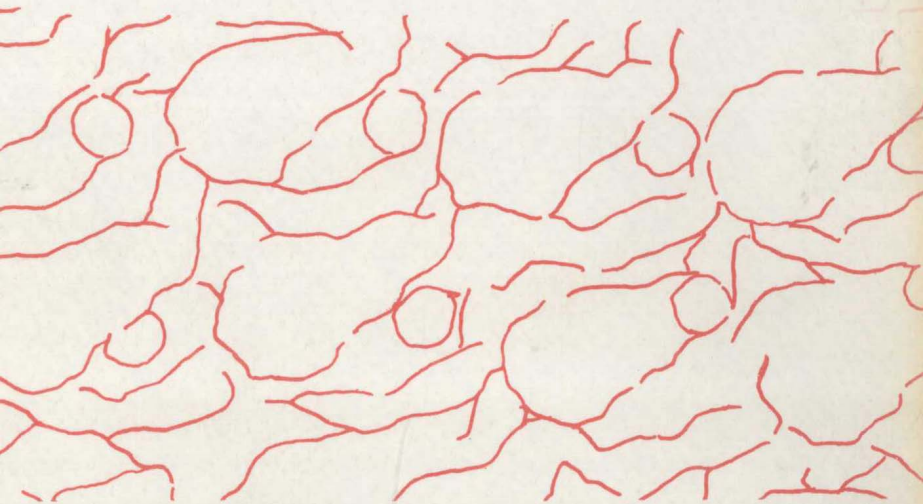


* 新鋭詩叢書 7 *



和田博文詩集

—〈火の使者〉への手紙—



和田博文詩集

——〈火の使者〉への手紙——

新鋭詩叢書

7

和田博文詩集

—— 火の使者への手紙 ——

発行 一九八五年八月二十日

著者 和田 博文

装本 倉本修

発行者 土岡忍

発行所 白地社

〒六〇〇

京都市下京区綾小路通岩上角

飯田ビル2F

電話〇七五八一一五五八七

振替京都二一三四三六七

印刷・正美社印刷／製本清水製本所

© 1985 by Hirofumi Wada

定価 一〇〇〇円

新銳詩叢書

7

和田博文

目次

I
物語の冒頭には……

II

憑人妄想 14

冬物語 1 19

冬物語 2 24

冬物語 3 29

水も昏れた 34

III

へ火の使者へへの手紙

				IV
				二月への道
			聖二月 1	68
			聖二月 2	73
			聖二月 3	77
			調書をとる	83
	和 田 博 文 ノ ノ ト			高 堂 敏 治
	跋	林 浩 平		96
	あとがき			88

和田博文詩集

物語の冒頭には……

霧立ち人……

深い白をさまよってきた、湾曲した運河ぞいの舗路に付
んでいる、立ち枯れる街路樹の間から、いや茫洋のむこ
うから、かすかに突きささってくるあなたの視線、たち
こめている昏睡、自失の只中にあるしかなく、くりかえ
し寒気は襲ってくる、凍りついた運河の此岸に、うちよ
せられ点々とくろずんでいる塵芥、もはやちりぢりの破
片たちを統べる思想が、わたしを訪れることはないのだ

ろうか、予兆さえ……、朦朧の、遠いあなたに、ぼんやりと焦点を結びはじめ暗い橋梁、揺らめいている橋上の影は、またしてもあなたではないのか、乱れていく呼吸、傷痕を踏む靴底が痛い、未明の橋畔に立つと、物音ひとつしない石畳は、対岸の闇へ消えている、

霧立ち人……

橋から橋を渡ってきた、耳を澄まし、きれぎれの不安をつないで、ここではないどこか、そう、いまだ視えざる物語へと、霧はさらに稠密に流れる、湿りついた微粒子が、内奥へ湧き上ってくる、無意識の深層から、浮上しては消えていく読点や括弧、誰が区切られ何が息潜めているのか、わたしはなお知らないでいる、……あれは尖

塔、閉ざされている狂気、……あれは有刺鉄線、遮断された空地、……おおしかし、解釈の不能からまたしても始めるしかなく、めまいのような散佚をたどりながら、おなじ周縁を廻りつづけている、気の遠くなるような囲繞、ざわめく不穩、あなたの気配を探しあぐねて虚空を見上ると、鐘楼は時を敲つこともなく、いちめんの白に見えかくれしている、

霧立ち人……

いつも呼びつづけている幻、戻ることもできず立ちすくむ瘦軀、霧が不意に途切れると、奥知れぬ暗い森から鋭い羽音が聞こえてくる、見まわせば墓所、だがつかの間の祈りでも安息でもなく、泡だつ血の音、未来からのか

らくりの前で放心しつづけている、まだ何ひとつ彫られていない墓碑銘たち、未だ、そしてたぶん……、ひんやりと儼くさい墓石の間をさまよっていると、過去からしだいに近づいてくる耳鳴り、頭蓋を影たちがざわざわとよぎっていく、いつまで兆候に導かれていかねばならぬのか、混迷を、あおざめた鳥が飛び立った墓所のはずれまで足を踏み入れると、そこからは誰知らぬ原野が広がっている、

霧立ち人……

見わたすかぎり涯ない霧、あらゆるものを覆い隠し、白い粒子がたち罩めては流れていく、濛々と漂う底なしの寂寥のただなかで、だれに待たれ、何の終りを見届けよ

うとしているのか、或いは始まりを……、すべての物語の冒頭には、触覚された異和の気配こそが記されてきた、さむざむと湧きおこる沈黙の内へ、さらに開かれてみようか、いまだ書かれざる書物の頁々を、びっしりと埋めつくしている白、何者かの隠喩よ、あなたをどのような言葉から語りだそう、わたしの欠如を、厚くのみこまれている埧塙、ぼろぼろの韻律に、気配、輪郭さえ確かではないとしても、まず命名し、茫々たる不明のかなたに、震える声で、低く、ゆっくりと、呼びかけてみる、

霧立ち人……

憑人妄想

そのとき

歩み去る背後に

水音を聞いた？

あれは

しらく霞む空をよぎる晩雁であつたか

薄明に隠れたきみの気配か

ものみな立ち枯れる

初冬 不安の底で

歩みはじめていたとする